発達理論の学び舎

Back Number: Vol 126

Website:「発達理論の学び舎」

© YOHEI KATO 2018

目次

2501. 屋久島を訪れる夢

2502. 自然に還ることとゆとり

2503. 爽快な春の朝に

2504. 科学・哲学・芸術の両立に向けて

2505. 色鉛筆の購入

2506. この世界に存在する無数の観察対象

2507. デッサンと作曲実践に潜む興味深い共通点・相違点

2508. 絶え間ない創造行為に彩られた生活

2509. 楕円の思想

2510. 論文の大きな進展

2511. 作曲とデッサンを始めた時期について思うこと

2512. 詩への関心の高まり

2513. 昨日の作曲実践への振り返り

2514. 充実感の溢れる日々

2515. 素晴らしき一日

2516. ドビュッシーの楽譜と魂のダンス

2517. 横山大観からの激励

2518. 四年間の精進に向けて

2519. 大我に至る

2520. 清々しい土曜日の夕方から

© YOHEI KATO 2018

2501. 屋久島を訪れる夢

今朝は六時過ぎに起床し、六時半から一日の活動を開始した。今、ちょうど私の視線の先には、早朝の空に浮かぶ白く輝く満月が見える。満月のある位置は、本当に私の視線の真っ直ぐ先にある。昨日は早朝の空に浮かぶ月の存在に気づくことができなかった。それはおそらく、空が雨雲で覆われていたからだろう。

今日は雲ひとつない晴天だ。早朝から天気がとにかく素晴らしい。書斎の外に広がる世界の青みが増している。以前はつぼみしかつけていなかった街路樹からは緑色の芽が生まれ、別の種類の街路樹にはもう葉っぱが生い茂っている。

早朝に天気予報を確認すると、今日からしばらくは晴れが続くらしい。今週末からは最高気温も20度に達する。ようやく湯たんぽや暖房を使わなくて済む日がもうすぐそこまで迫っている。明日、明後日まで最低気温が少し低いが、暖かい春がやってくることに喜びを隠すことができない。

春がやってくる確かな手触りを感じながら、今朝方の夢について少しばかり思い出している。いくつか印象に残っていることがある。夢の中で私は、共通の知人を通じて知り合った知人と初めて対面し、その場で話をしていた。自己紹介もそこそこに、私は唐突ながらその方に質問をした。

私:「これまでXXさんはかなり多くの場所に旅をされていると聞きました。国内か国外で三日間から四日間ほど旅をするならどこか一番お勧めですか？」

知人:「そうですね・・・三日間か四日間であれば、屋久島がお勧めです」

私:「屋久島？沖縄の？」

知人:「いえ、屋久島は鹿児島県に属しています」

私は、その知人の方から屋久島を勧めていただいた。屋久島と聞くと、大自然が思わず想起され、特に深い森や縄文杉などを思い出す。屋久島に関する記憶を辿っていると、私は実際に屋久島にいた。屋久島にある旅館の目の前で、私は一人たたずんでいた。

© YOHEI KATO 2018

その旅館は古くも新しくもなく、質素でも派手でもなかった。悪く言えば平凡な旅館であり、よく言えば落ち着いた旅館であった。その旅館の中に一歩足を進めると、そこは多くの宿泊客で賑わっていた。宿泊客をよくよく眺めてみると、私の小中高時代の友人や大学時代の友人がいた。また、外国人宿泊客の姿も目立った。その中で私は小中高時代の友人の一人に声をかけた。彼曰く、ゆっくりするために屋久島に訪れ、この地では特に何か観光をするわけではないとのことだった。

旅館の目の前に広がる大自然の中に入っていき、自然の中でくつろぐためにここに来たと彼は述べていた。私も彼と同じ目的でここに来た。屋久島の大自然がどのようなものであるかを肌で感じたかったことと、大自然の中でゆっくりしたいという思いがあった。しばらく彼と話をしていると、突然、三人の警官が旅館に駆けつけた。

何かの事件かと思ったが、それらの警官は起こった事件を解決しに来たわけではなく、何かの調査、あるいは事件を未然に防ぐためにここにやってきたようだった。私は警官の後ろについていき、彼らが何の目的でここにやってきたのかを突き止めようと思った。しかし、その目的は一向に定かにならなかった。私は警官の後についていくことを止め、気づかないうちに昼食時になっていたので、食堂に向かった。そこで料理を自分で盛り、空いている席を探した。

ちょうど大学時代のゼミの友人の顔が見えたので、彼の隣に腰掛けることにした。友人に挨拶をすると、彼の目の前には、私と同じぐらいの年齢のヨーロッパ人の女性が座っており、私の右横にはヨーロッパ人の男性が座っていた。さらに周りを見渡すと、ヨーロッパ人の観光客が多いことに気づいた。私は友人の目の前に座っている女性にも挨拶をし、隣の男性とは少しばかり会話を楽しんだ。彼らは共に英語圏からやってきたわけではないことが彼らの英語を聞くとすぐに分かった。しばらく彼らと話をしていると、突然夢の場面が変わった。

今朝方の夢については、特に上記の場面を覚えている。実際の私はまだ屋久島に訪れたことがない。屋久島はいつか足を運んでみたい場所の一つだ。ここ最近、自然への憧れ、自然へと還っていくことへの思いが募る。欧州での二年間の間に、文明の発達した様々な都市を訪れてきたこと、それと同時に、今現在都市の中で生活をしているということが、自然への憧れを引き起こしているのかもしれない。

© YOHEI KATO 2018

欧州での生活が三年目を迎えようとしているこの時期において、自然への思いが日増しに強くなっていく。いつか大自然の中で生活を営んでみたいという気持ちが静かに浮かんでくる。自然に還る日も近いのかもしれない。フローニンゲン：2018/5/2（水）07:11

No.999: Dying Verities

I was meditating on dying verities. All verities must exist eternally, but not only me but also someone else can feel that they are dying. Groningen, 10:46, Sunday, 5/26/2018

2502. 自然に還ることとゆとり

起床直後に見えていた満月がもう見えなくなってしまっている。ほんの数十分前まで空に浮かんでいた満月が突然に消えてしまったかのようだ。これは空がさらに明るくなったからなのだろうか。だが、七時を迎えた空の色と、六時半を過ぎた頃の空の色との差は、肉眼ではほとんどわからない。それぐらいに、先ほどの空も十分明るかったように記憶している。雲のない快晴の空から突如姿を消した満月について少しばかり思いを馳せていた。

先ほど書き留めた夢が暗示するものは一体なんであろうか？鹿児島県の屋久島を訪れる夢。屋久島を訪れたいという思いは以前から少なからずあったが、実際にそこに足を運んでみようという気持ちはそれほど明確なものではなかった。

しかし今、屋久島の存在が自分の中で重要な位置を占め始めている。あのような島が日本に存在することの不思議さ。写真でしか見たことのない屋久島の景色を改めて今ここで思い出していた。「神秘的」としか形容できないような、畏怖の念を引き起こさせる大自然が屋久島には残っている。いつか必ずその地を訪れてみたい。

あの夢が暗示していたことは一体何かということについて。あの夢を表面的に解釈するならば、自然に還ることや休息を取ることを私が欲しているということを示していたように思う。以前に比べれば、今は日本企業との協働プロジェクトは落ち着きを見せているため、覚醒意識の私はそれほど休息を取る必要を感じていなかった。

© YOHEI KATO 2018

何より、先々週までは中欧旅行に出かけ、その土地でゆったりとした時間を過ごしていた。そうしたこともあり、私は顕在意識の中では休息をそれほど必要としていなかったが、無意識の中の私はそうではなかったのかもしれない。

ここ最近、心の波が乱れるような出来事がいくつか重なっていたことも関係しているかもしれない。とにかく、落ち着いた生活を心がけようと思う。自分が意識している以上にくつろいだ形で日々の仕事を進めていく。心のゆとりを持つことをとにかく忘れてはならない。

焦らずに、ゆっくり着実に諸々の仕事を前に進めていこうと思う。仕事の量に関しては、今後調節をしていく必要があるだろう。全ての仕事を引き受けるのではなく、よく吟味した上で仕事を引き受けるようにしたい。でなければ、一つ一つの仕事の質が低下してしまうばかりか、心のゆとりを喪失することにもつながりかねない。

組成された規則正しい生活の中で、常に心のゆとりを確保し、全ての事柄を焦らずにゆっくりと進めていくこと。それを意識して今日からまた日々の生活を営んでいきたいと思う。フローニンゲン:2018/5/2(水)07:29

No.1000:A Purple Vortex

I didn't have enough time to read and write yesterday because I practiced meditation for several hours. Yet, the long meditation made my brain reorganized. Groningen, 08:37, Monday, 5/28/2018

2503. 爽快な春の朝に

一昨日や昨日の鬱蒼とした世界とは打って変わり、今朝は本当に素晴らしい天気が広がっている。昨日の夕方から突然晴れ間が見え始め、今日からは天気が良い日が続いていく。

先ほど書き留めていたように、ゆとりと落ち着きのある生活をとにかく心がけていく。生活を乱すものは、他者や社会そのものというよりも、往々にして私たちの心の持ちようである。これはいささか観念論的な発想かもしれないが。いかに心の在りようを変容させていくかが今後の私に求められている

© YOHEI KATO 2018

ことかもしれない。今の生活がより平穏なものとなり、自らのライフワークのみに専心できる内外の環境を整えていきたい。

昨年の夏に北欧旅行に出かけた際に持参した、エマーソンの書籍についてふと思い出した。エマーソンが自然を尊重していた真の意味を掴む必要がある。また、エマーソンの弟子でもあり友人でもあったヘンリー・デイヴィッド・ソローの生活についても再度考え直す必要があるだろう。ソローがマサチューセッツ州のウォールデン池畔の森の中に小屋を建て、そこで二年以上にも及ぶ自給自足の生活をしたことの意味を考えなければならない。

自分の心の在りようについては自分で責任を持ち、その舵を今よりも一層うまく取っていく。もはや舵を取る必要のない境地、つまり流れそのものと一体化することへの道のりはまだ遠く険しい。そうした境地に至るためにも、日々の生活の中でできる限り自覚的に自己の心のあり方に気を配りたいと思う。

起床してすぐに内的感覚をデッサンした。日々の生活の中でデッサンをする実践が徐々に習慣になりつつある。特に朝のこの時間帯には一度デッサンをするようにしている。また、早朝に過去に作った曲を一つほど聴き返す時にもデッサンをするようにしている。

少しずつではあるが、徐々に自分の内的感覚や内的ビジョンが視覚的なものとして形になりつつある。今日は午後のオンラインミーティングを終えたら、街の中心部にある文房具屋に行こうと思う。

今日は天気がとても良いため、ランニングがてら文房具屋まで走っていき、デッサン用の色鉛筆を購入しようと思う。色鉛筆を使うことにより、デッサンの実践がより充実したものになるだろう。今からそれが楽しみだ。

今日は午前中から、集中して論文を書き進めていく。一昨日に行われた研究アドバイザーのミヒャエル・ツショル教授とのミーティングの内容をもとに、論文をさらに前に進めていく。“Results”のセクションを少し書き足し、今日は“Discussion”の第一稿を完成させたいと思う。有り難いことに、来週の月曜日にもまたツショル教授とのミーティングの機会を得られたため、遅くとも金曜日までに進展した論文のドラフトを送りたい。今日はとにかく論文の執筆に十分な時間を充てたいと思う。フローニンゲン：2018/5/2（水）07:56

© YOHEI KATO 2018

No.1001: Jovial Fervor

It is sunny, and Groningen is replete with tranquility. I want to go outside with vigor on such a day. Groningen, 08:57, Monday, 5/28/2018

2504. 科学・哲学・芸術の両立に向けて

早朝の九時を迎えた。辺りが春の幻想的な雰囲気に包まれている。色彩に富み、生命力に満ち溢れた景色が目の前に広がっている。雲ひとつない爽快な青空、青々と茂る木々、躍動的に飛び交う鳥たち。そうした一つ一つの要素がこの幻想的かつ生命力に溢れた一つの景観を生み出している。そうした景観を眺めている私もまた、その景観に不可欠な要素としてここにある。

先ほど、トイレの暖房から聞きなれない音が出ていた。トイレの暖房に関しては、数週間前に完全に切っていたのだが、それでも暖かい熱が暖房から出ていた。もう一度暖房をつけ直し、改めて完全に切ることにした。しばらくして、突然その聞きなれない音が鳴り止んだ。音が鳴り止んだところで、書斎の暖房の温度を少し低くした。

世界は創造によって成り立っているということを先ほど改めて思った。絶え間なく続くこの創造の流れ。私たち自身の内側でも創造の流れは滞ることなく進行し続けている。私にできることは、自らの創造の流れの中で生きることであり、その流れの中で形を絶え間なく生み出していくことと、それを通じてこの世界の絶え間ない創造の流れに寄与していくことだ。

絶えず創造を宿命づけられた人間存在について思いを巡らせれば巡らせるほど、創造性というものについて関心が向かう。フローニンゲン大学での一年目のプログラムは、まさに創造性に焦点を当てたものであり、今改めてそこに関心が向かっている。人が創造性を育んでいくプロセスと、それを発揮するプロセスの探究。それは今後の私がより真剣に取り組んでいきたいと思っているものだ。

とりわけ創造性の発揮される領域として芸術の分野を想定している。芸術の中でも、音楽、特に作曲に関しての関心は尽きない。芸術と人間発達の探究をより深く行っていきたいという思いが日増しに強くなる。今後取得する博士号の一つ目は、まさに芸術と人間発達に焦点を当てたものになる

だろう。今のところ、このテーマ以上に自分が情熱を傾けられるものはない。芸術と人間発達が今の自分を強く駆り立てている。

今、書斎の中にはバッハの音楽が鳴り響いている。ここ数日間、ずっとバッハを聴き続けている。バッハの音楽を聴けば聴くほどに、バッハの思想と作品世界をより深く理解したいと強く思う。これは他の作曲家の思想と作品世界に対する理解を深めていく際にも当てはまるが、とにかくバッハについて書かれたものを読むだけではなく、バッハが書いた文章も読み進めていきたいと思う。

また、解析的にバッハの楽曲を分析することと、分析を離れた形で純粋に感覚的に曲を聴いていくということも行いたい。後者に関しては、単に曲を聴き流すということを意味しない。そうではなく、集中した意識を持ってバッハの音楽に接するということだ。そうした実践をしなければ、バッハの思想や音楽世界は一向にして見えてこないだろう。

科学・哲学・芸術の両立。あるいは、それらが三位一体となった生活を早く実現させたいと思う。だが、焦ってはならない。それは焦って実現されるようなものでは決してないのだ。辛抱強く毎日少しずつ前に進むこと。日々の小さな歩みを積み重ねていくことでしか、そうした生活は実現されないだろう。

科学・哲学・芸術の三つの領域が自分の内側に真に統合され、それら三つの領域に絶えず関与した日々を生きられるのだということを自ら証明したいと思う。それらのうち一つたりとも欠けてはならない。真善美の追求とそれらが満ち溢れた日々の実現に向けて、今日もまた自分にできることを積み重ねていきたい。フローニンゲン:2018/5/2(水)09:21

2505. 色鉛筆の購入

清々しい風が辺りを吹き抜けていく。今日は早朝から晴れに恵まれ、今も天気が良い。早朝は雲一つなかったが、今は少しばかり入道雲が見える。だが、それでも太陽の光は燦然と降り注いでいる。今頃になってようやく気付いたが、フローニンゲンのこの時期の気候はサンフランシスコの涼しい気候を思い出させる。

© YOHEI KATO 2018

昼食後に一件ほど協働プロジェクトに関するミーティングを行い、ミーティングの終了後、私はランニングがてら街の中心部の文房具屋に向かった。その道中、ランニングに出かける際は長袖を着る必要はなく、半袖で十分なことに気づいた。

また、そうした涼しさを実感していると、フローニンゲンの街の気候がどこかサンフランシスコを想起させた。もちろん、冬の季節は比較にならないぐらいフローニンゲンの方が寒い。米国の西海岸にあるサンフランシスコの冬とここの冬を比べることはできない。ただし、春から夏にかけての気候であれば、両者はとても似通っているように思う。ランニングの最中に頬を伝う風は、二つの街の共通点を私に気づかせてくれた。

文房具屋に到着すると、すぐさま色鉛筆の置かれているコーナーに向かった。幾つかの種類があったが、24色のそれなりの物を購入した。事前の調査によると、色鉛筆には大きく分けると水性のものと油性のものがあるそうだ。水性のものは芯が固めであり、細かい描写に向いている。また、水に溶けるという特徴を活かして、水に濡れた絵筆などでぼかしやグラデーションを表現することも可能だ。 一方、油性のものは芯が柔らかめであり、発色が良い傾向にある。私は細かい描写をしたいと思っていたので、今回は水性のものを購入することにした。

色鉛筆を購入したのは一体何年振りだろうか。それを購入した時、どこか幼少時代の気持ちを思い出した。芸術というのは、私たちの存在を深めていくことのみならず、童心を思い出させてくれることにもつながるのかもしれない。芸術の奥深さと魅力は尽きることがない。

文房具屋を後にした時の私の気持ちは高揚していた。自宅に帰る足取りも軽やかであり、購入した色鉛筆を用いてこれからデッサンできることが楽しみでしょうがなかった。

今日はこれから作曲実践を行い、一曲ほど曲を作る。その曲を聴きながら喚起された内的感覚を早速作曲ノートにデッサンしておこうと思う。作曲とデッサンが終われば、午前中に引き続き研究論文の執筆を進めていく。来週の月曜日に行われる論文アドバイザーのミヒャエル・ツショル教授とのミーティングに備え、当日意見交換するための文章を執筆していく。

具体的には、対象としているMOOCのある週の講義を一つ例に取り、その週の講義の特徴を三つの定量化基準をもとに定性的に議論していく。さらに踏み込んで言えば、各講義の中で変動性の

調和が取れているピンクノイズを発している時系列データを取り上げ、その定性的な特徴について議論をしていく。つまり、フラクタル次元としてピンクノイズを持つ講義にはどのような特徴があるのかを具体的な形として文章にしておきたい。それをもとに来週の月曜日のミーティングを行う。

上記の点については今日中に執筆できるであろうから、明日に“Discussion”の文章を書き始めていき、それと合わせてツショル教授に論文のドラフトを送りたい。

相変わらず春の穏やかな風が吹いている。その風に揺られる木々の葉を眺めてみると、どこか心が落ち着いていく。フローニンゲン：2018/5/2（水）15:37

2506. この世界に存在する無数の観察対象

今朝は六時過ぎに目覚め、六時半から一日の活動を開始させた。起床した時間と一日の活動を開始した時間は共に昨日とほぼ同じ時間帯である。興味深いことに、今日も早朝の空に満月が見える。ぽっかりと浮かぶ白い月を眺めていて興味深いと思ったのは、満月が見える位置が昨日と異なることだ。

昨日とほぼ同じ時間帯に満月を見つけることができたが、昨日は自分の視線から一直線の位置に満月があった。一方、今日は随分と東の方に満月が寄っている。感覚的に10度ほど東の方角に満月が寄っているように思う。もしかすると観察をする時間帯が少しずれており、観察時間のズレがそうした変化を生み出していたのかもしれない。

今目の前に見えるうっすらと白く輝く満月がどのように変化するのかについてはもう少し観察を重ねたいと思う。昨日は、もうしばらくすると満月が早朝の空から姿を消してしまった。今日もそうしたことが起こるのであろうか。その辺りも含めて、今朝は月をもう少し観察したいと思う。

昨日の夕方にふと思ったが、ある一つの事物を観察し続けることの意義のようなものがあるように思う。逆に言えば、日々繰り返しある対象と接し、それを継続的に観察しなければ見えてこないものがあるのだ。継続的な観察を長大な時間にわたって行っていくことによって、初めて開示される側面というのが森羅万象には存在しているかのようである。これは何も外的な世界の現象だけに当てはまることではなく、内的な世界の現象についても当てはまるだろう。

私は知らず知らずのうちに、自分の内的世界を絶えず観察するようになった。何がそうした観察を促しているのかは分からない。だが、そうした促しそのものを含めて、日々自己の内的世界を観察しなければ日々を生きていけない自分がいることは確かだ。内的世界の観察に関しては、多くの先人を見習う必要があるだろう。

とっさに脳裏に浮かんだのは、精神分析学の始祖であるフロイトだ。ウィーンでフロイト博物館を訪れた時、そこに所蔵されている品々を眺めながら、フロイトがどれだけ心の世界の探究を真摯に続けていたのかがわかった。ある種異常とも呼べるほどに心の世界を観察し続けることによって、フロイトにしか見えないものがフロイトに開示され始めた。自分の夢を千を超えるほど分析したり、無数のクライアントの精神分析を行うなど、フロイトが積み重ねた観察は膨大な量に及ぶ。そうした膨大な観察とそれに伴う考察が、精神分析という一つの学問領域の確立につながっていったのである。

今日も私は内外世界に対して諸々の観察を続けたいと思う。観察をしようという能動的な意識というよりも、自己が観察に導かれていくという自発的な何かが自分の内側にある。自然な形で無数の観察を続けていくこと。観察の継続とそこからの大きな発見に至るには、自発的な形で自己を動かす力に身を委ねるのが最善だろう。

ふと顔を見上げると、満月の位置が動いているのがわかった。この数十分の間に満月が動いていたのだ。ここからわかるのは、先ほどの10度のズレの原因は、やはり観察時間の違いにあるのかもしれないと思った。天文学について一切の知識がないため何とも言えないが、自転と公転の周期のズレから、これから日を追うごとに観察時間のズレのみならず、そうした周期差が月の見える位置を動かしていくかもしれない。

月を発見したのが昨日であり、そこから少しばかり観察をしてみただけで、様々な探究の余地がこの現象にあるということがわかる。私は今日も、必ずや諸々の興味深い観察事項と出会うに違いない。この世界には無数の観察対象で溢れている。そう思うだけで今日を生きることが楽しみになってきた。フローニンゲン：2018/5/3（木）06:58

© YOHEI KATO 2018

2507. デッサンと作曲実践に潜む興味深い共通点・相違点

起床直後、いつもと同じく身体を少し活性化させた。その後に、一日分のお茶を作った。お茶を入れて、今日の一杯目を飲みながら、まずはデッサンを行った。昨日近所の文房具屋で色鉛筆を購入したことにより、デッサンがより充実した実践になり始めているのを実感する。

購入した色鉛筆の描き心地は申し分なく、デッサンをする喜びをさらに高めてくれている。デッサンを行っている最中は、作曲の最中と感覚が似ている。どちらも没頭状態にあり、意識状態が特殊なものになる。脳波で言えば、おそらくは最初はリラック状態のアルファ波が発せられており、そこからさらに深い意識状態に参入した時に見られるデルタ波のようなものが発せられているかもしれない。

いずれにせよ、デッサンも作曲も特殊な意識状態を誘引するようだ。意識の状態を日々の生活の中で変えていくことは、私にとって非常に意味のあることである。意識そのものに変動性を加え、意識の状態を質的に異なるものにしていく実践は、自己を健全に保つ働きと、自己の涵養につながっている。もしかすると、こうしたことの中に創造活動の意義、とりわけ芸術的創造の意義があるのかもしれない。

デッサンと作曲についての共通事項について考えを巡らせていると、確かに両者には上記のような共通点がある。一方で、少しばかり異なる点があることも確かだ。二つの実践領域が異なるものであるため、異なる感覚を引き起こすというのは当然に考えられることだ。私の中では、デッサンを行っている最中はほとんど認知的な思考というものが介入せず、色の選択から形の具現化まで無意識的になされることが多い。

いったい自分は何に身を委ねているのかわからないが、自己の存在が何か大きな空間の中にくつろぎ、その中で自分の思考や認知的な判断などをほとんど下すことなくデッサンがなされていく。そうした様子を後ほど振り返ることも様々な気づきがもたらされるが、そうした状態から通常の状態に戻ってくると、どこか自分の中で小さなシフトが起こったような感覚になる。自己を無限の創造空間に委ね、その中にくつろぐ。

© YOHEI KATO 2018

くつろぎの中で、内側から湧き上がってくるものを無心に形にしていく。そのようなことがデッサンの中で生じており、起床直後に行ったデッサンにおいてもそのようなことが見られた。一方、作曲実践はデッサンのように無限の創造空間に自己を委ね、そこにくつろいで作曲を行うこともあるが、それは今の私には稀な現象である。どちらかというと作曲は、思考を働かせることと感覚を働かされることが半々のようである。

思考と感覚のどちらもが程よく発揮されており、その調和の中で曲を生み出していくのが今の自分の作曲実践において見られる現象である。昨日の作曲実践を振り返ってみても、曲の中に規則性を生み出すことは、思考と感覚の両方を発揮させなければ成し遂げることができなかった。比喩的に言えば、音のパズルを自らで作り出し、そのパズルを思考と感覚をもってして自ら解くような実践が今の自分の作曲プロセスの中に見られる。音のパズルの最初のピースは紛れもなく感覚的・直感的に生み出される。

一つ目のピースが生み出されて以降は、思考と感覚が調和し、そうした調和状態の中でパズルの続きが生み出され、それが次々に解決に向かっていく。作曲とデッサンという創造行為がもたらすものの違い、そして創造プロセスの違いについては本当に興味深く思う。

これらの点については実践を通じて観察と考察を深めていきたい。いつか自分の中でのデッサンの意味を曲として表現し、作曲の意味をデッサンとして表現したいと思う。そうした日の実現に向けて、今日も実践を通じた観察と考察、そして技術の修練に励みたいと思う。フローニンゲン:2018/5/3(木)07:16

2508. 絶え間ない創造行為に彩られた生活

穏やかで優しい雰囲気が早朝のフローニンゲンを包んでいる。フローニンゲンにもようやく春がやってきたようだ。天気予報を確認すると今日は快晴であり、これから一週間晴れが続く。今日の深夜が0度近くまで冷え込むが、明日以降は最高気温・最低気温ともに暖かくなる。一つの季節が終わりを告げ、新たな季節の始まりを知る。

昨日、近所の文房具屋に行くために軽くランニングをしたが、改めて身体を動かすことの効用に気づかされた。将来的には水泳を毎日行うことができれば理想だが、今は週に一度のランニングは欠

かさずに継続していこうと思う。ちょうど明日の昼は、近所のノーダープラントソン公園へランニングに出かけ、その足で行きつけのインドネシア料理店に立ち寄りたいと思う。身体を動かすことにより、心身の滞りが溶解されていくような感覚があり、なんとも言えない解放感を味わうことができる。

日々の生活の中で思考ばかりを巡らせるのではなく、自らの身体を通じて生きること。哲学者のメルロ=ポンティが「私とは身体である」とまで述べたように、自己の存在と身体は密接な関係にある。身体に宿るもの、身体の意義そのものについてもう一度思い出さなければならない。日々の至る所で身体を意識し、適宜走りに外に出かけるということを欧州の三年目の生活でも大切にしていきたいと思う。

昨日ふと、生きている間に売れた絵が一枚だったゴッホについて思いを馳せていた。ゴッホが弟のテオに宛てた全ての手紙が収録された資料をまだ全て読み通すことができていない。この夏から少しずつゴッホの手紙を紐解いていきたいと思う。ゴッホの絵が生前に一枚しか売れなかったことについて、妙に私の心を動かすものがある。絵が売れなかったことが私の心を動かすのではなく、絵が売れなかったとしても絵を描き続けたゴッホの生き様に心が激しく動かされる。

絵が売れなかったというのは世間からの評価が得られなかったことを意味しているだろう。ゴッホの絵はその当時の世の中にはほとんど認められなかったのだ。それでもゴッホは絵を描き続けた。その姿勢には言葉を超えて打たれるものがあり、感覚的に激しいものが自分の内側に流れてくるのがわかる。

二週間前に訪れたブダペストのバルトーク記念館でも同様の体験をした。バルトークのとりわけ活動の初期において、彼の音楽が当時の世の中から認められなかったことを初めて知った。実際にバルトークは、世間の音楽理解に落胆し、以降数年間ほど公的な演奏を控えた。そこからバルトークは本格的に民族音楽の収集活動に励むようになる。

演奏活動を中止している間にも、バルトークは音楽的な探究を継続させていった。世間から認められることがなくても己の探究活動と創造行為に従事し続けたゴッホやバルトークの姿勢には、私を突き動かす何かがある。

© YOHEI KATO 2018

私の中で、創造行為に本格的に従事したいという思いが日ごとに高まっていく。とりわけ、作曲とデッサンにより真剣に打ち込みたいと思う自分がいる。時間的にも量的にも、今よりもそれらの二つの実践に激しく打ち込みたいと思わせる何かが自分の中にある。また、そうした創造行為に合わせて、それらの創造行為に関する科学的・哲学的な探究にも従事したいという思いが強くある。

今の私は、科学・哲学・芸術の三つの領域に従事していながらも、それらの領域の実践が分断されてしまっているように思える。ここから私がなすことは、それらの領域を真に統合した実践を行っていくことであり、自分の日々の生活をそうした一つの統合体の中で営んでいくことだ。科学・哲学・芸術の領域を、日記・デッサン・作曲という三つの創造行為を軸に越境していく。そこで得られた発見事項を論文の形も含めて何らかの手段を使って世に共有していく。

そのようなことに本格的に従事する自分の姿を創造している。誰も見ていないところで絶えず創造行為を営み続けること。それが一つの信条となり、その信条の具現化に向けた生活が徐々に実現され始めている。フローニンゲン：2018/5/3（木）07:44

2509. 楕円の思想

今日は午前中に、知人の方とオンラインでミーティングをさせていただいた。対話の話題に尽きることはなく、無数の気づきが私の中で生まれたことは間違いないが、改めて午前中の対話を振り返ってみたときに、一つ大変興味深い話があったことが印象に残っている。

それは「楕円の思想」と呼ばれるものだ。これは二つの異なる円が重なりあっており、それら二つの円をさらに包摂する一つの円をイメージとして持つ。これはまさに「正反合」の発想と非常に似た発想でありながらも、円のイメージが私の中で強く印象に残っている。こうした印象を自分の内側に残しているのは、この思想と成人発達理論の思想が繋がっているからではないかと思った。

相矛盾するものや対極的なものの中に共通点や相違点を見出すところに留まるのではなく、そこから一歩認識世界を深め、それらの共通点や相違点を包括するようなさらに一段高い認識世界を構築していくというのは、まさに私たちの発達プロセスにおいて見られる。

© YOHEI KATO 2018

単純に二つの円の共通点や相違点を見出すのではなく、それら二つの円そのものを包摂するような新たな円を認識することが可能になってくる。この点において私は、「真理は常に矛盾の中に宿っている」という言葉の意味が明確なものに思えてきたのである。一段高い真理というのは矛盾の中に宿っているのだ。相矛盾した二つのものの先には常に新たな真実が待っている。

人間の発達というのは、真実が開かれていくプロセスなのだ。そのようなことを思う。そうした思いを持っていると、これからなお一層東洋思想を学びたいという思いが強くなってくる。まずは龍樹、空海、道元らの思想に範を求めることになるだろう。そうした探究を支援してくれるものとして、井筒俊彦先生の仕事がある。この夏は時間をかけて井筒先生の書籍と向き合っていきたい。

気づけば昼食の時間が迫ってきた。午後からは作曲実践を少し行い、午後の時間の多くは論文の執筆に充てたいと思う。

今日は気づけば木曜日であり、平日なのだが、どこか休日のような感覚が自分の中でする。時期としては日本のゴールデンウィークに該当することもあり、何か日本の集合意識が自分の意識と共鳴し合っているのだろうか。

日々創造行為に従事する中で、いつか本当に創造行為だけに没頭する生活を送りたいと思う。それを行うために街を離れ、自然の中に還っていく。より自然が身近にある生活を送りたいと強く思う。仮に街に住まざるをえないとしても、街の中心部を避け、できるだけ自然の豊かな場所で暮らしを営むようにする。

昨年の夏に訪れたノルウェーの印象がまだ私の内側に強く残っている。ノルウェーを含めた北欧諸国の生活環境にどこか憧れのようなものを自分は持っているようだ。自然の中には私を惹きつける何かがあり、大切なものがそこにある。自然の中で、自然に近い場所で創造行為に打ち込む日の実現に向けて、今日の残りの時間がある。

自分の内側に自然を見出し、内外の自然を通じて生きることのできる日がやってくるのはそれほど遠くないだろう。フローニンゲン：2018/5/3（木）12:00

© YOHEI KATO 2018

No.1002: Impulse

A serene wind is blowing through Groningen. I'm feeling not only such a wind that blows in early summer but also an impulse inside myself. Groningen, 08:46, Tuesday, 5/29/2018

2510. 論文の大きな進展

成層圏が見えるかのような青空が広がっている。時刻は夕方の七時半を迎えた。この時間帯のフローニンゲンはまだまだ明るく、夕方の四時ぐらいの様相を呈している。気づかない間にこの時間帯になった。

今日は本当に論文の執筆がはかどった。論文の"Discussion"セクションに着手したのだが、数時間をかけて無事に初稿を書き終えることができた。自画自賛を避けたいところだが、今回の研究は本当に面白い結果が得られた。研究の出発地点から掲げていたキーメッセージである、「発達現象の表層だけに囚われてはならない。深層を見よ」という言葉を裏付ける実証結果を得ることができた。

具体的には、対象としているMOOCの講義ビデオに対して三つの定量化基準を活用して時系列データを作り、その時系列データに潜むフラクタル次元を調査することがいかに重大かを示す結果が得られた。もう少し説明すると、単に三つの定量化基準によって作られた時系列データと学習成果（完遂率、クイズスコア、テストスコア）には統計的に有意な相関関係は見られず、それらの時系列データを持ってしては学習成果の予測をすることができないことが示された。

一方で、時系列データの背後に潜むフラクタル次元を「標準分散化解析」によって明らかにし、それと学習成果との相関関係を眺めると、統計的に有意な結果がいくつかの組み合わせの中に見られたのである。仮に時系列データだけを表面的に眺めていては、学習成果を予測するための変数が何であるかが見えてこなかったのである。

補足事項としては、時系列データというのはダイナミカルシステム理論（ダイナミックシステム理論とは別の応用数学の一つの領域）おいて一つのシステムとして扱われる。専門的には、それは「ダイナミカルシステム」と呼ばれる。このダイナミカルシステムに潜む構造的なパターンを分析することがいかに大切かを、MOOCの文脈において明らかにしたのが今回の調査の一つの大きな意義である。

© YOHEI KATO 2018

執筆した文章の誤字脱字などを確認し、論文アドバイザーのミヒャエル・ツショル教授にドラフトを送った。

このドラフトをもとに行われる月曜日のミーティングが今から楽しみである。前回のミーティングで有り難いことに、今回得られた調査結果は査読付き論文として世に送り出すに値する、とツショル教授からコメントをいただいた。ツショル教授と協働して執筆する二本目の査読付き論文として、今回の修士論文をもとにぜひとも査読付き論文を執筆したいと思う。今回の修士号は三つ目であるため、今回三回目の修士論文ということもあり、いろいろと勝手を知っている自分がいる。

これまでの経験があるおかげで、論文の執筆を滞りなく進めることができ、質的にも過去の二つの論文よりも高いものになっているのを実感する。学術論文の執筆という一つの実践領域を取ってみても、この七年間を通じて確実な進歩を遂げている自分がいることを実感する。

ツショル教授からのフィードバックを待つため、明日と今週の土日は一旦論文の執筆から離れ、協働プロジェクトや作曲実践に力を入れたいと思う。今週末はとても充実したものになるという予感がする。フローニンゲン：2018/5/3（木）19:46

No.1003: The Morning for a Departure

I'll leave for Amsterdam to participate in the 48th Annual Conference of the Jean Piaget Society. I really look forward to the three day's conference and my presentation on Friday. Furthermore, I have a particular expectation for the Van Gogh Museum to visit today. Groningen, 07:35, Wednesday, 5/30/2018

2511. 作曲とデッサンを始めた時期について思うこと

午前中の空の表情を忘れることができない。午前中の雲はどこか微笑むかのような表情を見せていた。そうした表情を見て、私は思わず微笑んだ。微笑みをもたらす雲。それはこの世界の至る所に存在している。あとは私たちがそうした雲の存在に気付くかどうかだ。雲の微笑みを見逃してはならない。そこに幸福への道が隠されている。そのようなことを思う。

夜の八時に近づいてきたにもかかわらず、空が本当に明るい。日が完全に沈むのは九時半を過ぎてからだろう。今日は午後から暖房を切った。ようやく日中に暖房をつけずに過ごすことができるようになった。これから一週間、快晴が続き、気温も上がるため、気候として非常に恵まれた日が続く。明日は昼食前にランニングに出かけようと思う。

昨日までは断続的な雨が降る日が多かったが、そうした雨がどこか穏やかな黄色の雨に知覚されたことをふと思い出す。穏やかかつ黄色に知覚された雨の持つ意味。そして、自分自身の状態について考える。雨がそのように知覚されたことは非常に興味深い。実際に私は、その知覚体験をデッサンとして記録しておいた。

また、以前作った曲に対して、この知覚体験に基づいたタイトルを付した。作曲やデッサンは間違いなく、普段の科学的・哲学的な探究実践とは異なる感覚を刺激している。作曲やデッサンの実践の積み重ねによって、これまで閉じていた感覚が開かれつつあることに気づく。閉ざされた感覚世界が徐々に開いているのを強く実感する。

それがまさに曲や絵としても具現化されていることからも、感覚世界の拡張と深化はこれからもゆっくりと進んでいくだろう。これまでの自分の歩みから考えると、作曲やデッサンをしている今の自分はつくづく不思議で仕方ないが、よくよく考えてみれば、父は絵画を描き、母は音楽を演奏する特性を持っていたことが今の自分に強く影響を与えているのかもしれない。

また、個人的に大変興味深く思うのが、幼少時代の私は絵画や音楽に一切関心を示していなかったことだ。それが成人期を迎え、しかも30歳を前にして突然それらの芸術領域に関心を強く示すようになったことは本当に興味深い。そして、30歳を迎え、欧州での生活を始めることによって、突如として絵画や音楽を単に鑑賞するのではなく、実際に絵と曲を創造するようになったことに対しては、自分でも驚きを隠せない。

本当に自分の人生は始まったばかりなのだとつくづく思う。特に、創造活動に関してはようやくスタート地点に立ったとしか言いようがない。

以前父の実家を訪れた時、父が小学校時代に針金か何かで作った自転車を祖母が見せてくれたことがある。それを見た時、父は幼少時代からとても手先が器用だったことを知った。

© YOHEI KATO 2018

父は社会人になってから本格的に絵画の制作に取り掛かり始めたが、当時の父の年齢と今の私の年齢はほぼ同じではないかと思う。私が作曲を始めたのも、デッサンを始めたのも、父が本格的に絵画を描き始めたのと多分に重なるという偶然に驚かされている。この偶然に潜む意味を自ら見出していきたいと思う。そこに何か大切な真実が隠れているに違いない。フローニンゲン：2018/5/3（木）20:09

No.1004: In the Dulcet Morning

Now I'm staying in Amsterdam. I visited the Van Gogh museum yesterday, which gave me a myriad of encouragement and inspiration. Literally, I was encouraged and inspired by Van Gogh. The early morning in Amsterdam is dulcet. Amsterdam, 07:34, Thursday, 5/31/2018

2512. 詩への関心の高まり

今日は六時半前に起床し、少しばかり体を動かしてから一日の活動に取り掛かり始めた。早朝まず行ったことは、その日最初の心身の状態を確認するかのように、その瞬間の内的感覚をデッサンすることだった。二色の赤を用い、力強く静かに燃えるような炎を描いている自分がいた。炎の中心にはオレンジ色で中心点のようなものを少し大きめに描いていた。

デッサンをする直前から自分の中に活動的なエネルギーが流れていることがわかり、それが自然と表現されたのだと思う。デッサンをした後にタイトルとして“Life Energy”と付した。

起床直後に内的感覚をデッサンすることが徐々に習慣になり始めている。これは新たな習慣として継続させていきたい。これまでは早朝に身体を動かしたらすぐに日記の執筆に取り掛かっていた。だが今は、身体を動かした後にデッサンを挟み、その後に日記の執筆をするようになっている。

身体的な実践の後にすぐさま言葉を用いる実践に行くのではなく、その前に一つ実践のクッションとして直感的にデッサンをするというのは、閉ざされた感覚が開放されつつある今の自分にとって望ましいだろう。

© YOHEI KATO 2018

今後は早朝に作曲を行うようになるかもしれない。その際に作曲実践をどのタイミングで行うかはその時になって明らかになるだろう。今は作曲技術の高度化に努め、より自由に作曲が行えるようになる必要がある。そうした段階を迎えた時、早朝にも作曲実践が自然と組み込まれてくるだろう。

昨日の作曲実践について少しばかり思い出している。昨日は、一昨日に作ったモチーフを参考に曲を作っていった。曲を作る前からどのような構成にしようかという明確なイメージがあった。

私はいつも短い曲を作ることを意識している。長い曲を作る技量と音楽的集中力がないということも確かだが、どうしても俳句のような簡潔な構造の中でその瞬間に生起していることを音楽的に表現したいという思いがある。大きな曲を断続的に作っていくのではなく、私はとにかく毎日新しい曲が作りたい。小さな曲を無数に創造していき、それを何十年も継続していくことによって、創造した一連の曲が一つの巨大な曲になるようにしていきたいという意志を持っている。

そうしたことから小節の数をできるだけ抑え、時間としても短いものを毎日作っていくようにしている。俳句の5・7・5の構成のように、小節の数としては8・8・8の24小節を最小にして、そこにさらに8小節を足すかどうかはその時の判断に委ねられている。そのため、たいていの曲は24-32小節という非常に短いもので落ち着いている。俳句とは別に短歌を比喩として取ると、さらにもう8小節を加えて40小節の曲を作るというのが今のところ最大の長さのように思う。

このように見てみると、私は、文字数があらかじめ定められている定型詩の構成に何らかの魅力を感じ、それに影響を受ける形で曲を作っているように思える。作曲技術が高まってくれば、今後は定型詩の形ではなく、文字数に制限のない自由詩のような曲を作っていくかもしれない。

その時にもおそらく短い曲であることに変わりはないであろうが、構成の変化についてはいつかそれが起こるかもしれず、それもまた別の楽しみだ。今でも覚えているのが、米国在住時代にイェール大学を訪問した時、そこで聞いた鐘の音に触発され、私は突然詩に対して関心が向かったことだ。鐘の音と詩がどのような因果関係があるのかは全くわからない。だが、それ以降、自分の中で詩という表現形式と詩の世界に強い関心を示し始めたことは確かだ。

そこから実際に詩を作り始めるというところまでは至らなかったが、今日改めて詩について関心を持っている自分がいることに気づいた。詩を作ることは今のところ考えていないが、これからは積極的に

過去の詩人が残した詩を読んでいこうと思う。そんなことを早朝に思った。フローニンゲン：2018/5/4（金）07:16

No.1005: Amsterdam in Early Summer

The second day to stay in Amsterdam began. Although I need to make a conference presentation in the evening, I'll relax in the hotel, reading a book of van Gogh's paintings and composing music. Amsterdam, 10:55, Friday, 6/1/2018

2513. 昨日の作曲実践への振り返り

早朝に詩について考えていると、これまでの自分はなかなか詩の世界に入っていくことができなかったのかはなぜなのかを考えていた。より具体的には、なぜ自分は詩の世界観を理解することが難しく、詩を読むことに困難さを抱えているのかということだ。一つの詩を理解することはいつも難しい。それを困難にする原因として、詩を外側から理解しようとする態度があるのではないかとふと思った。

詩というのは、その作者の内的世界の表現であるため、外側から詩に向かっていっても理解できるはずなどないのである。むしろ、作者の内的世界を理解するというよりも、その詩的世界の中に自らの存在を投げ入れ、まさに新たな詩をそこから作るような形でその詩を内側から掴んでいく必要があるのではないかと思わされた。

私が詩の理解に困難さを示していたのは、詩的世界へ自己を投げ入れることをせず、内側からその世界観を把握する姿勢を持っていなかったことに起因しているように思う。詩的世界と音楽世界の間には、どこか共通するものや共鳴するものが横たわっているように思えてくる。ここから少しずつ、日本語や英語で詠まれた優れた詩を読んでいくようにしたい。それは自分の作曲実践をさらに豊かなものにし、日々をより充実したものにしてくれるだろう。

先ほど、昨日の作曲実践について振り返ろうとしていたが、途中で脱線してしまい、最後まで文章を書き終えることができなかった。昨日の作曲実践では、最初から構成を厳格に決めており、モチーフに関しては一昨日に使ったものをアレンジしようという意図があった。

そうして曲を作ってみると、若干失敗のように思えた。最初から構成と用いるモチーフを厳格に決めてしまったことに問題あるのか、モチーフの発展のさせ方に問題があったのだろうか。どちらかというと、後者に問題があったのかもしれない。というのも、これまでも構成を最初に決めておき、あらかじめモチーフを設定しておくことはあったが、その時にはうまくいくことが多かったと記憶している。そうしたこともあり、モチーフの発展のさせ方に問題があったのではないかと思う。

そもそも昨日は最初から短調の曲を作ることに決めており、雰囲気も少しばかり寂しげなものにしようと思っていた。だが、一昨日に作った曲が華やかなものであったため、そこで用いたモチーフと昨日に作ろうとしていた曲のイメージがなかなか合わず、今の私の技術ではそうしたイメージのズレを解消させることが難しかったのだと思えてくる。

日々の実践は本当に小さな失敗の連続であり、そうした失敗と向き合っていく中で、学びが徐々に深まっていく。それが技術の発達に寄与していくのだろう。

今日は幸運にも作曲実践に時間を充てる時間が十分にあるため、少しでも技術を向上させるような実践を行いたい。フローニンゲン：2018/5/4（金）07:33

No.1006: Dance of Two Winds

I'll leave Amsterdam later and come back to Groningen. Once I arrive at Groningen, I convince myself that my life will be fresh and new. Amsterdam, 08:06, Saturday, 6/2/2018

2514. 充実感の溢れる日々

一羽の鳥が優雅に青空を飛んでいる。早朝の空には雲ひとつなく、今日も快晴だ。また、風もほとんど吹いておらず、街路樹が凛とした姿でたたずんでいる。新緑の鮮やかな色がとても眩しく感じる朝だ。

私はいつも早朝に昨日の振り返りや、今日一日の活動内容について書き留めるような習慣を持っている。今日も例外ではなく、早朝に二つほど昨日についての振り返りを行っていた。厳密には、昨日の段階ですでにその日の振り返りを済ませており、今朝行っていたことは、昨日の実践を通じ

て発酵した学びを汲み取るための内省だと言っていいかもしれない。起床してすぐに何か文章を書き出すことができるのは、就寝中に昨日の学びが寝かされ、一日の発酵を経て新たな気づきや発見を自分にもたらすからだと思う。

このように考えてみると、学びというのは寝ている間にも起こっているようだ。そうした学びを新たな学びにつなげることに対して、早朝に日記を書くというのは非常に有益であるように思える。朝から気づきや発見が溢れ出しており、そうした気づきや発見の奔流を通じて一日を開始させる毎日だ。

昨日に研究論文が多いに進展したことに伴い、今日から月曜日までの三日間は論文から一旦離れ、自由な探究活動に時間を充てることができる。強く読みたいと思う論文や書籍に目を通し、作曲実践を行うことに十分な時間を充てたいと思う。

午前中にまず取り組みたいと思っているのは、過去の日記の編集である。今日から三日間を使えば、編集もかなり進んでいくだろう。一日に編集をする分量を多くしすぎるのではなく、無理のない範囲で編集を行っていく。その後、ワルシャワで購入した“A Philosophy of Emptiness (2014)”という書籍と、“Time-Structured and Net Intraindividual Variability: Tools for Examining the Development of Dynamic Characteristics and Processes (2009)”という論文を読み進めたい。

前者に関しては哲学書だが、久しぶりに意識の形而上学に関する書籍を購入したように思う。本書は、「空(くう)」の思想を原始東洋思想の観点から解説しており、書店でこの書籍を手に取った時、とても惹かれるものがあった。今日から一読目を開始させる。書籍と論文の双方を全て午前中に読むことは無理だと思うので、程よいところで一旦切り上げ、昼食前にランニングに出かけたい。

ノーダープラントソン公園はきっと春の様相を呈しており、生命力に溢れているに違いない。そんな期待感がある。

昼食後からはまず作曲実践に取り組みたい。早朝の振り返りをもとに、今日の実践も実り多いものにしていく。今日はベートーヴェンに範を求めようと思う。作曲実践を終えたら、現在協働で執筆している書籍の原稿に目を通す。

© YOHEI KATO 2018

協働執筆者の方から依頼があったように、今回は忌憚なく自分のコメントを原稿に付していく。全てを一読するのが難しければ、今日と明日の二回に分けたいと思う。原稿を読み終えたら、再び午前中に取り掛かっていた書籍や論文に目を通したいと思う。具体的な実践内容は異なれど、実践の種類に関しては明日も明後日も同じになるだろう。今日も充実感に溢れた一日になりそうだ。フローニンゲン:2018/5/4(金)07:57

2515. 素晴らしき一日

今日はなんと素晴らしい一日なのだろうか。今日という一日が持つ光とその輝きに思わず目がくらむ。今日の日の素晴らしさと美しさをこの瞬間に誰かに共有することができなくても、それを文章として書き留めておくことによっていつか誰かと共有したいという思い。そんな思いを駆り立てるような一日が続いている。

午前中、過去の日記を編集し、昼食前に私は近所のノーダープラントソン公園へランニングに出かけた。今日は雲一つない青空が広がっており、風も穏やかだ。

今日は金曜日であるが、その時間帯には公園でくつろぐ人たちの姿を多く見かけた。各々がその人なりのくつろぎ方を持っており、その人なりの固有の時間をこの公園で過ごしていた。ある人は犬と散歩をし、ある人はベンチで座って休んでいる。ある人は公園をランニングし、ある人は芝生の上に寝転んで本を読んでいる。そんな光景を目の当たりにしながら、私は公園内を走っていた。

公園の真ん中にある池に向かっている時、池の前の並木道が、どこか四年前に私が住んでいた東京の府中の公園の姿と重なった。あの頃私はよく、府中の森公園に走りに出かけていた。あの時の春に見た光景がノーダープラントソン公園での今の光景と重なった。私はほのかな風に揺れる新緑の木々を眺めながら、ゆっくりと足を前に進めていった。

公園を抜け出てからは、街の中心部に向かい、行きつけのインドネシア料理店で昼食を購入した。今日は本当に良い天気であり、インドネシア料理店からの帰り道も心が躍るのを抑えることは難しかった。これからしばらくの季節は、本当にランニングに最適だと思う。少なくとも週に一回はノーダープラントソン公園へ走りに出かけようと思う。とにかく存在は身体を基礎にしているということを忘れてはならない。

午前中、以前作った自分の曲を聴きながらデッサンをしていると、曲の複雑性とデッサンで描かれるシンボルの複雑性には何かしらの関係があるかもしれないと思った。つまり、曲に体現された意味の深さとデッサンとして開示される記号世界の深さが共鳴しあっているかもしれないということだ。

私が作った曲は非常にシンプルなものであり、そのシンプルさに対応するかのような簡素なシンボルがデッサンによって生まれた。おそらく、非常に緻密に構成された曲を聴きながらデッサンをすると、より精巧なシンボルが生まれてくるのではないかと思わされた。曲の中にはやはり固有の複雑性が宿っており、それは意味世界の深さだと言い換えることができる。実験的に、自分が作った曲のみならず、過去の偉大な作曲家が作った曲に対してもデッサンをしてみようと思う。

早朝に、作曲と俳句や短歌と関連付けた事柄を書き留めていた。そこからふと、短い曲の中に自分の内的感覚をうまく表現することができるのかどうか疑問に思ってしまう自分が現れた。しかし、バルトークが『ミクロコスモス』という一連の作品で成し遂げていたように、それは可能だと認識を新たにした。短い曲の中で一つの内的感覚を十分に表現することは可能なのだ。そのヒントがバルトークのミクロコスモスの中にある。

今日は時間が許せば、ベートーヴェンの曲に範を求めるだけではなく、バルトークの作品にも範を求める形で曲を作っていきたいと思う。

一息に大きな宇宙を作ろうとしないこと。小さな一つの息の中に小さな宇宙がすでに宿っており、それを積み重ねていくこと。それをあと何十年にも渡って積み重ねていくこと。

横山大観、葛飾北斎の姿勢と生き様に範を求めること。今日もこれからできる限りの創造活動に従事していく。フローニンゲン：2018/5/4（金）13:19

2516. ドビュッシーの楽譜と魂のダンス

ランニングを終え、昼食を摂り終えてから少しばかり過去の日記を編集し、今日編集を行おうと思っていた全ての日記の編集を終えた。その後、イギリスの書店に注文していたドビュッシーの楽譜を先ほど受け取った。厳密には、隣の家の方からそれを受け取った。私は本当に近所の人たちの世話になっていると思う。

特に郵便受けに入らない書籍を受け取る際は、常に近所の人が代わりに受け取ってくれている。日本ではあまり考えられないかもしれないが、オランダでは当人が不在の場合、近所の家に荷物が配達され、どの家に届けられたかがわかる不在票が郵便受けに入れられる。

私はいつも、右隣か左隣の家の人から荷物を受け取る。私は家にいることが多く、宅配の人が来た際に不在であることはあまりないのだが、諸事情によりいつも近所の人に郵便受けに入らない荷物を受け取ってもらうことになっている。というのも、私は家の呼び鈴の音がダメなのだ。あのけたたましいブザー音を聞くたびにいつも驚いてしまい、心臓の脈拍が極度に変わることに気づいている。そのため、この家で生活を始めてしばらくしてから呼び鈴が鳴らないような設定に変えた。そのため、私は家にいながらも荷物を受け取れないようになっている。

先ほど隣の家に行き、その家の主人から荷物を受け取った。まさにそれがドビュッシーの楽譜であった。およそ500ページ弱の楽譜を先ほど全体を通して眺めてみた。すると、思っていた以上にドビュッシーの作品には外見上の複雑さがないことに気づいた。

想像していたよりも構造が簡潔な曲が多く、それでいて簡潔さに宿る独特の美を宿した曲が多いのだと直感的に分かった。ベートーヴェンのピアノソナタの多くの曲のように、範を求めづらいことはなく、明日からでもドビュッシーの曲を参考にし始めたいと思う。

近日中にリストの楽譜が何冊か届く。今回のドビュッシーの楽譜はピアノ曲全集であり、この一冊の中におそらくほぼ全てのドビュッシーのピアノ曲が収録されている。一方、リストに関してはそのようなピアノ曲全集を見つけることができず、必然的に四冊ほどの楽譜を購入することになった。これらに関しては近日中にドイツから届けられることになるだろう。それらはできるだけ郵便受けに入って欲しいと願う。

数日前まで冷たい風が吹いていたが、先ほどランニングをして気づいたように、今日はほとんど風がない。今目の前に広がる、この晴天の青空をどのように形容したらいいだろうか。言葉で表現することも、曲として表現することも、絵として表現することも今の自分にはままならない。そうしたもどかしさが創造活動にさらに駆り立てていく。またそうしたもどかしさを生んでくれるものこそが、この世界の複雑性であり、究極的な素晴らしさなのだと思う。

© YOHEI KATO 2018

今の自分の内面はとても穏やかであり、それでいて力強い。一つ一つの生命が優しく、そして力強く躍動していることを感じさせてくれる春の雰囲気が、自分自身の生命の躍動に気付かさせてくれる。生命が持つ魂には固有の弾みがあるようなのだ。一つ一つの魂が持つ内在的な弾性。無数の魂が今自分の目の前の世界に顕現し、それらがダンスを踊っている姿を見ることができる。フローニンゲン：2018/5/4（金）14:18

2517. 横山大観からの激励

――富士の名画というのは昔からあまり無い。それは形ばかり写すからだ。富士を描くということは、富士に映る自分の心を描くことだ。心とは畢竟、人格に他ならぬ。それはまた気品であり、気迫である。富士を描くことは、つまり己を描くことである。己が貧しければ、そこに描かれた富士も貧しい――横山大観

さざ波のような静かな衝撃が自分の内側を流れている。ぼんやりと窓の外の世界を眺める。

時刻は夕方の五時を迎えたが、正午のような太陽が燦然と輝いている。街路樹の葉が音を立てずに揺れている。

昨夜、改めて近い将来に世界一周の船旅に出かけようと思った。同時に私はふと、日本全国を一年間かけてゆっくりと巡りたいとも思った。欧州での三年目の生活、つまり欧米での七年目の生活がいよいよ始まろうとしている。

先ほど私は、“A Philosophy of Emptiness (2014)”という書籍の数章に目を通し、“Time-Structured and Net Intraindividual Variability: Tools for Examining the Development of Dynamic Characteristics and Processes (2009)”という論文を読み終えた後、休憩がてらコーヒーを入れに食卓に向かった。

その時に、近々改めて眺めようと思っていた横山大観の画集が目に入り、思わずこの画集に手が伸びた。これは今から二年前に、家族旅行として島根県の足立美術館を訪れた際に購入したものだ。この画集を改めて開いたとき、言葉にならないほどの衝撃を受けた。それは以前に大観の作品から受けた以上のものであり、大きな感動を伴うものであった。

二年前の私が感じることのできなかったことや汲み取ることのできなかった意味が、その瞬間に広がっていた。大観のこの画集がそばにありさえすれば、欧米であと何年も、何十年も生活することが可能であると思った。

それぐらいに、大観の作品は私の存在の拠り所としての意味を持っている。『雨霽る(あめはる)』という作品を眺めた時、少しばかり言葉を失った。この絵が生み出された繊細かつ熟達した技術について思いを馳せ、そうした境地に至った大観の精進に感銘を受けた。次に見た、『南溟の夜(なんめいのよる)』という作品の持つ社会性に打たれるものがあった。

第二次世界大戦の前年に描かれたこの作品は、日本の当時の戦況を静かに物語っている。そうした戦況が客観的に描かれていたのではなく、大観の深い主観性に裏打ちされて描かれている。

二つの作品をしばらく眺めながら、大観の作品と思想から汲み取れるだけのものは全て汲み取らなければならないと確信した。「人間ができて初めて絵ができる」という大観の言葉が自分の内側に深く入り込んでくる。

「世界人になって初めて、その人の絵が世界を包含するものになると思います」という言葉を残した大観。この言葉が持つ絶対的な真理。

そうした絶対的な真理が自分の内側に体現されてくるまで、この画集を擦切れるぐらいに鑑賞しようと思う。横山大観という芸術家の偉大さは底が知れず、大観の思想と作品から本当に多くの励ましと促しを受けている自分が今ここにいる。フローニンゲン:2018/5/4(金)17:40

2518. 四年間の精進に向けて

今朝は六時過ぎに起床し、六時半から一日の活動を開始させた。風のない穏やかな土曜日が今始まろうとしている。

起床した六時頃は、ちょうど東の空に太陽が姿を現し始めた頃だった。今はその時よりもさらに明るくなり始めており、光が現れ始める最初の姿を捉えることができる。この世界を照らす光がこれから徐々に強くなっていく。そんなことをふと考える。

昨日偶然に手に取った横山大観の画集から受けた衝撃を忘れることはできない。絵からもたらされるものと相まって、巻末に記載されていた大観の言葉一つ一つには本当に打たれるものがあった。

芸術というのはつくづく人間性の涵養を第一のものとするのであって、真の芸術というのは涵養された人間性から生み出されるものなのだ。芸術を通じた人間発達の探究の道が開かれ、芸術を通じた人間発達の支援の道が新たに開かれたような感覚を得た。

日々、創造的な活動に従事する中で、自らの人間性を養っていくのみならず、芸術の意義とそれがもたらすものについては本当に深く考えていかなければならない。今の私にはどこか、発達科学という科学を通じた探究以上に、芸術を通じた人間発達の探究に重要性を見出している。両者が開示してくれるものとそれらがもたらすものにはそれぞれ固有の価値があるが、今は兎にも角にも芸術と人間発達に関心の矢が向かっている。この関心により強く自己を委ねようと思う。

今日は午前中に協働プロジェクトに関するミーティングが一件ほどある。今日は土曜日であるから、それ以外にミーティングは入っておらず、一日の大半は自分の探究活動に多くの時間を充てることができるだろう。

昨日に引き続き、過去の日記を編集すること、“A Philosophy of Emptiness (2014)”の続きを読むこと、協働執筆中の書籍の原稿をレビューすること、作曲実践を行うことに従事したい。

昨日は当初の予定通り、ベートーヴェンとバルトークに範を求めて曲を二つほど作った。今日は初めての試みになるが、昨日届いたドビュッシーの楽譜をもとに、ドビュッシーの曲に範を求めて作曲をしようと思う。

この数年間はとにかく型の習得に励む。手持ちの楽譜に掲載されている全ての曲を参考にしていくような数年間にしたい。自分の内的感覚に純粋に立脚し、何も参照せずに曲を作るようになるのは数年後からで十分である。型の習得に激しく精進するのはとりあえず四年を目安にしよう。四年後から何も参照せずに曲が生み出せ始めたら、それは十分早いぐらいだ。

一日一曲ほど手持ちの楽譜に範を求めて曲を作っていけば、四年間で1500曲近くの曲を生み出すことができる。数としては全くもって少ないが、それでもその四年間の修練は大きな意味を持つだ

© YOHEI KATO 2018

ろう。こうした実践を積み重ねて初めて、ようやく自分なりの作曲方法と音楽世界が見えてくるような気がしている。今日も大切な精進の一日となる。フローニンゲン:2018/5/5(土)06:51

2519. 大我に至る

昨日も考えていたことだが、四年間にわたって集中的に修練をすることの意義は計り知れない。一つの領域に関して毎日絶えず研鑽を積んでいくことの尊さと価値を昨日に考えていた。

作曲に関しては、日々の歩みは本当に遅いものだが、小さく一歩を積み重ねていきたい。本音を言えば、作曲実践に一日の探究時間の半分以上を充てたいところだが、今はそうしたことができない状況にある。

現在自分が関わっている学術研究と協働プロジェクトにも固有の意義と価値があることを忘れてはならない。だが、近い将来に必ずや、作曲を含めた創造活動だけに専念するような時がやってくるだろう。芸術に立脚した人間発達の探究。そうした探究に邁進する日々を近い将来必ず送りたいと思う。

今は諸々の意味において別の修練を積む時期なのだ。学術研究や協働プロジェクトを通じて、そうした修練を積ませていただいている時期にあるのだ。

今日という日の研鑽がどれほど大事な意味と意義を持っているだろうか。自己の内側に横たわる創造的なものを真に開放し、創造活動を通じてこの世界に真に深く関与していくためには、毎日の研鑽が本当に欠かせないのである。それを常に肝に銘じて毎日の一つ一つの実践に励んでいこうと思う。

小さな自我が打ちのめされるような体験、言い換えれば自尊心が打ちのめされたことのない人間には真の仕事などなしえないことを横山大観の生き様から学んだような気がしている。

大観が創始した新たな絵画制作手法は、当時の世の中に受け入れられず、多くの批判を受けていたことを知る。大観の描く絵は「お化けのような絵」と評されることもあったぐらいであり、その絵画制作手法は「朦朧体(もうろうたい)」と揶揄されていた。

大観の人生史を辿ってみた時に、12年間の間に八人の近しい人を亡くしていることを知った。そこに画風の批判が重なっていた。大観本人がのちに述べているように、これらの一連の出来事は大観を大きく揺るがすものであった。私が大観の作品と思想に打たれるものがあるのは、大観がそうした過酷な体験と向き合う中で自らの人格を陶冶し、涵養された人間性を通じて作品を作り続けたことにあるのではないかと思う。

近親者を立て続けに亡くすという不幸と自らの芸術手法に対する世の中からの批判は、大観の自己に付着する自我を焼き尽くしたに違いない。「人間ができて初めて絵ができる」という言葉、そして「世界人になって初めて、その人の絵が世界を包含するものになる」という言葉がそれを物語っている。

小さな自我から脱却し、大我に至る。大観はそれを成し遂げた一人の芸術家だったのだと思う。フローニンゲン:2018/5/5(土)07:12

2520. 清々しい土曜日の夕方から

土曜日の夕方。夕方の四時の時間帯はフローニンゲンで最も気温が高くなる。今はとても暖かく、先ほどゴミを捨てに外に出た時、爽やかな風が頬を撫でた。西日が燦々と照っており、少しばかり眩しいので書斎のカーテンの大部分を閉めた。

今朝、この街を満たす晴朗さに感じるものがあった。とても清らかな時間の流れと空間がそこにあった。こうした晴朗さの中に啓蒙世界への階段が見えるかのようだった。

自宅近辺の静けさには本当に感謝をしなければならない。この静かさのおかげで私は日々の仕事に打ち込むことができている。この世界の本質には、静けさというものがあるに違いない。時折私は、自分の内側に究極の静けさを見出すときがある。そして、その内側の静けさは安らかさを私にもたらす。静けさと安らかさは、深層的な世界における一つの本質的な側面なのだろう。

午前中に過去の日記を編集した。この編集作業も着々と進んでおり、知らず知らずのうちに随分と多くの日記をこのひと月の間に編集してきたように思う。過去の日記を読み返す意義、そしてそこにまた新たな気づきを書き足すという編集作業の意義は計り知れない。その意義についてはこれまで

何度も一連の日記の中に書いてきたように思う。今日もまたそうした意義について触れる体験があった。とりわけ、昨年の春にウィーンとザルツブルグに訪れた際の日記から、新たな気づきや発見を随分と得た。

オーストリアを訪れたことが一年前であったことがどこか信じられない。今このようにして書き留めている日記を来年読み返した時、同様のことを思うのであろうか。来年の今頃は何を思い、何を考えながら過ごしているのだろうか。日々変容を遂げていく自分に対して少しばかり驚かされている。

本当に私たちは日々変容の方向に向けて歩みを進めているようだ。一年前に日記を書いた自分と今の自分は、自己の同一性を保ちながらも、異質な存在になっている。これは自分でも驚く。来年の今頃の自分は一体どのような変容を遂げてそこにいるのだろうか。それはこの瞬間には全く未知であるが、新たな自己の側面が開かれた自分に会う日は必ずやってくる。

今日は土曜日ということもあり、今一週間分のカレーを作っている最中である。調理場からカレーが煮詰まる音が聞こえる。もうしばらく煮込みを続けようと思う。今日はこれから昨日読み始めた哲学書を読む。その書籍を読み切ることができれば、森有正先生の日記に目を通したい。

夕食後からは協働執筆中の書籍の原稿に目を通し、適宜コメントを挿入したい。就寝前にはまた作曲実践を行って今日の日を締めくくる。とにかく絶えず創造活動に従事する形で自分の全てを深めていくこと。知識体系、諸々の技術、人格など、自己の存在が内包する全てを深めていくことによってようやく何かを始めることができるのだと考えている。あと数年間は、出発地点に立つための準備と修練をとにかく進めていく。

何かを本当に開始するのは数年後からだということを自分だけは知っている。フローニンゲン：2018/5/5（土）16:40

© YOHEI KATO 2018